

東京大空襲体験者ら

# 独の被災者と交流

## 追悼行事参加、共に祈り

【ドレスデン（ドイツ東部）で篠田航二】第二次大戦末期、約10万人が犠牲になった東京大空襲などの被災体験者らが13日、ドイツの空襲被災都市ドレスデンを訪問し、現地の体験者と交流した。1945年2月13日は約2万5000人が死亡したドレスデン大空襲があった日で、被災から67年目のこの日、日

独の被災体験者が追悼行事に参加し、共に祈りをささげた。訪独した被災体験者は、45年3月10日の東京大空襲を体験した二瓶治代さん(75)▽国立市▽と同年7月の鹿児島県の空襲で左足を失った安野輝子さん(72)▽堺市▽で、東京や大阪の研究者ら計約20人も参加した。二瓶さんはドレスデ



ン市内の教会で約100人の聴衆の前に「当時私は8歳で、家族5人で逃げた。私だけ爆

風に吹き飛ばされ意識を失ったが、気付いた時、体の上に炭のよう

に黒くなった死体がい

くつも折り重なって見られた。ドレスデン空襲を体験したノラ・ラングさん(80)は「自分のことのように聴き入った。同じ思いをした人間として、共に平和を訴えていきたい」と話した。

「ドイツのヒロシマ」でも形容される。「エルベ川の真珠」と呼ばれた古都は約8割が焼失したが、市のシンボル聖母教会は05年に再建された。教会の屋根にある黄金の十字架は、爆撃をした英空軍パイロットの息子らが奉納したもので、「和解」の象徴となっている。

くつも折り重なって見られた。ドレスデン空襲を体験したノラ・ラングさん(80)は「自分のことのように聴き入った。同じ思いをした人間として、共に平和を訴えていきたい」と話した。

訪問団はその後、爆撃被害が激しかった旧市街地周辺で、ドレスデン市民ら約1万人が

手をつないで平和を訴える「人間の鎖」にも参加した。一行は18日まで滞在し、ハンブルクなど別の被災都市も訪れる。

ドレスデン空襲は、ナチス・ドイツの降伏約3カ月前のほぼ戦況が決っていた時期に行われたため、欧州では無意味な市民殺りくの代表例として知られ、